

美食家魯山人の生まれるきっかけは 猪の肉だった

マルチ芸術家・北大路魯山人。人名事典ふうにならば、明治十六年（一八八三）京都市賀茂神社の社家、北大路清操の二男として生まれ、名を房次郎という。五歳の時に福田家の養子に入った。

若年の頃から書をよくし、篆刻、陶芸でも一風を成したが、料理にも堪能で日本料理の近代化に貢献した。

広範囲に及ぶ活動のなかでは、陶芸、ことに食器の評価が高い。料理の生きる器を作り出したところに特色がある。

しかしその生涯は極めて不軌無頼で、自由奔放な生活態度、不遜な言動は世の非難を浴びた。

とはいえ、周囲の人々はその技のすばらしさは認めざるを得なかった。

その魯山人、料理について残している言葉は、日本料理が中心なので肉に関するものは少ない。

なかで彼が初めてもののおいしさを自覚したときのことを「猪の味」という随筆に書いている。



十歳ぐらいのとき、食通だった養父によく猪の肉を買いにやらされた。ある日のこと肉屋の親爺が肉を取り出して切るのを見て、これはおいしさに違いないと直感する。

「子ども心にも非常に貴重なもののようにそれを抱えて、楽しみにして帰って来た。

うちの者も、その肉の美しさを見て非常によろこんでいた。

早速煮て食ってみると、果せるかな、美味しい。

肉の美しさを見た時の気持の動きも手伝ったことだろうと思うが、食道楽七十年を回顧して、後にも先にも、猪の肉をこれほど美味いと思って食ったことはない。

私は未だにそれを忘れない。私が食物の美味さということを初めて自覚したのは、実にこの時であった。」

希代の美食家はこの瞬間に生まれたのだ。